

愛琴堂全集 別府市不老町五組 中島東二郎氏蔵
但し別本一冊は別府市石垣 佐藤義詮氏蔵

七

中島子玉の生れた佐伯は、さあき、または、さいき、とよび、今の大分県佐伯市・城山の東ふもと、番匠川の小デルタ上にあり、佐伯湾に臨み、南海部地方の中心である。慶長六年（一六〇一）毛利氏二万石が日田からこの地に移封され、城山に鶴谷城を築き、四キロメートル西の梅牟礼城下の市街を移してから、城下町として発達した、といふ。

寛政七年（一七九五）十四歳の玄蕃淡窓はこの地に遊んだ、そのときの印象を『懐旧樓筆記』（淡忘全集上巻）卷五に次のように記す。

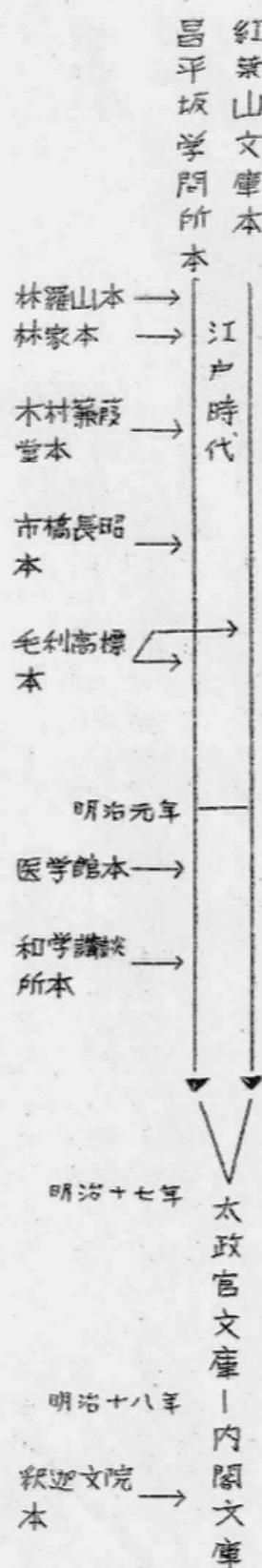
佐伯ノ城ハ。大手ノ門・南ニ向ヒタルト覺エタリ。山城ニシテ。城門並ニ候宮ハ。山下ニアリ。樓櫓ノ類ハ。山頂ニ見エタリ。其規模竹田ノ城ニ比スレバ小ナリ。然レトモ。亦名城ナリ。城門ニ入りテ。其左ニ學校アリ。四教堂ト云フ。コレハ。今ノ佐伯侯ノ叔父扶搖公子ト云フ人アリ。熊目先生ノ門人ニシテ。有名ノ文人ナリ。其旧宅ヲ以テ。學校トセシ者ナリ。……佐伯城下ハ。海ニ浜シタリ。浦ノ數凡ソ九十九浦アリ。土地セマシト雖モ、魚塙ノ利多ク。士民富饒ナリ。其城ヲ鶴城ト号ス。憶旧ノ篇六ニ「鶴城ノ樓閣ハ海ノ浜。松ハ綠ニ沙ハ明ラカニシテ廢起コラズ。

百浦ノ魚塙ニ民ハ自ラ富ミ。風帆ハ相接ス浪華ノ津ニ」……佐伯学校ノ儒員。松下先生祭酒タリ。其下ニ四人アリ。野村丈右衛門。山本七兵衛。古田節右衛門。岩崎九兵衛十リ。学校ノ監ヲ古賀五郎左衛門ト云フ。當時ノ目附ニシテ。学監ヲ兼ネタリ。職儒員ノ上ニアリ。学校ニ出入スルモノ六七十人。……此時佐伯侯、東都ニ述職シ玉ヘリ。人ノ言ニ。吾侯在城ナラハ。必引見ノ事アルヘシト云ヘリ。侯ハ好文ノ君ニテ。極メテ博聞強識ノ人ナリ。佐伯威儀ニ富ムコト。海内無双ナリ。ミナコレ侯ノ求メ財ヘ王ヒシナリ。城外ニ羽明山龜誠寺アリ。六七月、間ト覺エシ。其寺ニ開帳アリ。其所ニ赴ケリ。時ニ城下ヨリ。納涼。且ツ寺ニマウデントシテ。舟ヲ浮フルモノ數ヲ知ラズ。管絃謡歌ノ声。洋々トシテ海面ニ盈テリ。

佐伯の領主毛利氏は宇多源氏の一派流で、敦実親王の裔である備中守頼綱にはじまり、第十二代伊勢守高政が佐伯二万石の領主となり。中野氏の解題にみえる高翰は第二十一代である。扶搖公子とは毛利扶搖のことで、名は聚、字は公錦、図書と称し、臺邱または扶搖子と号した。享保十五年（一七三〇）佐伯侯の庶子として生れ、水戸の重臣山野辺氏の養子となり、兵庫頭と称した。漢学者として知られ、「制度考」「書籍考」「畫部詩稿」などの著書があり、天明六年（一七八六）歿、五十七歳。松下先生とは、久留米の浪人で、日田で塾をひらいて文学を教授した松下求馬。名は夷、字は世民、西洋先生と号した。（洋意は十歳で松下の弟子となつた。）寛政六年春、佐伯の儒官となつた。佐伯の蔵書に富むことの一例に次のような例をあげてもよいだろう。

現在の内閣文庫におさめる漢籍は半大な量にのぼり、質的にもすぐれらるが蔵書の源流を同文庫

目録は左のように図示している。



この毛利高標は、さきに記した毛利高輪の祖父である。佐伯は禄高の低い外様の小大名國ではあるが、生産にも文化にも活潑な内福の地だったのだろう。そして代々の領主が好学で教育に熱心だったのだろう。

八

中島子玉の父については中野氏の記事程度のことしかわからず、母や兄弟についての知識もない。菩提寺の過去帳をみればわかるであろうが、それを探査することは、いまのわたしにはできない。子玉その人についても、十五歳以前のことはずつとびらかでない。中野氏の解題にいふように幼時から学問を好んでその才は人の知るところとなつていたのであろう。十五歳の詩が集に保たれる。

「先賢資料」における『愛琴堂全集』は、

一、海棠高吟稿 童穀集卷之一 斧犬集卷之二 鼓音集卷之三 蝶穀集卷之四

二、談俠 卷上 卷下

三、理窟瑣記

よりなる。一が詩、二と三は文である。一は文政六年癸未（一八二三）夏、二十三歳の子玉が、江戸の昌平舎で自ら編み、自ら序文を書く。二も同じとき、に編み、秋に序文を書いている。三には序文はなく、この稿は中野氏の解題にいうように四分の三を焼失したので製作時などについてはわからぬ。

「海棠吟稿」の序によれば、十五歳から二十三歳にいたる作をあつめて四つの集とした、といふ、その順序は製作の年次によるようである。すなはち「童穀集」の前半の若干首は十五歳の作であろう。

題画（画に題す）

橹響遙喧晚渡 草烟露霧滿春曉 孤舟獨釣羊裘客 家在垂楊柳樹西

橹響は遙喧として晚渡に喧しく、草烟は露霧として春曉に満つ。孤舟に独り釣る羊裘の客、家は垂楊柳樹の西に在り。

梅雨即事

雨暗千山又萬山 茅簷點滴夜眠閑 山童聞戸葉奇事 三尺溪魚躍砌間

雨は暗し千山又た万山。亭簷の點滴に夜眠は闇なり。山童は夜を聞いて奇事に驚く。二三尺の
溪魚、御闇に躍る。

詩はまだ幼いけれども、結句には、少年の驚きが生き生きとあらわれている。

山行

石綾藉受足 溪上捫蘿行 幽鳥尋巢聲 暗泉隔樹鳴 細蹊登又下 群蘂隱幽晴 隘處多佳景

高吟遣勝情

石綾 足を受け難し。溪上 藤を捫つて行く。幽鳥 巢を尋ねて噪ぎ、暗泉 樹を隔てて鳴る。細蹊 登つて又た下り、群蘂 隠れて（暮陰つてか）還た晴る。隨處に佳景多し。高吟 勝情を遣る。

梅雨即事

一雨蕭條獨倚欄 空林螢火夜將闌 村南草堂人歸去 緙陳酸風鬼嘯寒

一雨 蕭條 独り欄に倚る。空林 螢火 夜将に闇けんとす。村南の草堂 人帰り去る。緙
陳の酸風 鬼嘯 寒し。

この作には李賀詩を嗜ひようになる傾向のようなものが感じられる。とはいっても個性がきわだつといつたものではない。

文化十三年丙子へ一ハ一六〇十六歳の子玉口佐伯侯の命によつて、同藩の古田豪作と共に日田の広瀬流に入門する。

鶴聲促征鐸　匹馬出柴門　落日橋邊寺　孤烟竹裡村　路有山樹轉　花換客衣翻　停立清溪畔
空林叫斷猿

鶴声　征鐸を促し、匹馬　柴門を出す。落日　橋辺の寺・孤烟　竹裡の村。路有　山樹を穿つて転じ　花は客衣を換つて翻る。清溪の畔に佇立すれば、空林に断猿叫ぶ。

波野原作

溪邊駐馬立斜曛　波野原頭遠望分　指転同蘇烟一缕　春風吹作教筆黃
溪邊に馬を駐めて斜曛に立つ。波野原頭　遠望　分る。指転すれば河蘇の烟一缕、春風吹いて教筆の雲と作る。

求求里路上

徑路幾千轉　行行眼界新　山靈如有助　詩句自嶮崎
徑路　幾千轉　行き行いて眼界新たなり。山靈　助けるが如く、詩句　自う新たなり。

吉岡曉発

匹馬青山外　早行興壯哉　棧懸路稍轉　崖斷石將傾　晚夢前人失　空林古寺聞　故鄉何處是
天末一鴻廻

匹馬　青山の外、早行　興　壯なる哉　棧懸つて路稍や転じ、崖斷えて石將に傾れんとす。曉霧に前人失し、空林に古寺聞らく、故郷は何處か是れぞ、天末に一鴻廻る。

「これらはたぶん佐伯から日田への途上の吟である。淡窓が十四歳で日田から佐伯へいったときは、四月一日に出発し、八日に到着している。子玉らが同じ道を通り、いかどうかは知らぬが、いずれにしても、一日を左右するぐらいであろう。三月四日に子玉らは淡窓の門にはいった。日田の到着が前日の三月二日とすれば、二月の二十六日か七日に佐伯をたったことになる。詩にうたう情景ともよくあう。」（「一週間ほどの旅は、子玉にとって恐らく最初の体験で「求求里路上」の作にいふように、行き行きて眼界新たに、吟詠する詩句も自ら嶙峋、かれが詩といふものに、「はじめて体でぶつかり、目をみひいた」という感じがする。

さて、三月四日の「淡窓日記」（『淡窓全集中巻』卷七に次のように記す）もとは漢文。
佐伯戻り古田豪作。中島増太、入門。……古田七左衛門^{豪作}、父へ正直、字ハ子由^(由)中島幹
右衛門^{增太}、父へ圭、字ハ白圭^(圭)ノ書至ル。之ニ般ズ。

正道・子由・圭・白圭は、豪作と増太の名字である。二人の父の書至るといふのは、おもづく二人が持参したものであり、之に報ずとは、その返事を書いたことである。

二十七日、月旦評ヲ改タム。竜雲ヲ二級下ニ加工・提吉・鼎、一級上ニ加ウ。増太・豪作。節山。直千二入帝。而シテ増太・豪作、一級下ヲ加ウ。百葉、重五郎、法鏡、曉齋、除名。
凡ソ七十人。

淡窓ハ塾生ノ學習状況ヲ觀察し、毎月末に等級を与えた。この評定を月旦評^{ムダヒゲ}と呼んだ。入席とは等級を与えてられる資格が出来たといふことなのである。なお同月二十一日の日記に「徂徠

集文部卒業」二十二日「文部軌範輪講始業」とみえる。子玉はこれらを學んでいるのである。

九

「この稿をやや進めたとき、また雜事に妨げられた。五月一日朝『淡窓日記』に帰ると、文化十三年四月二十三日「病後始メテ官府ニ詣ル」。此日、簿書ヲ検シ、因縁極マレリ矣。少陵ノ狂ヲ発シテ大叫セシ、宣ナル哉。眞ニ我ガ事ニ非ザルセ」「少陵ノとは杜甫の「早秋苦熱堆案相仍」に「東帝發狂欲大叫、簿書何急來相仍」とさす。千二百年前も、百五十年前も、今も、官なるものが簿書のバケモノであることを知つて今さらのように感嘆し、官吏のはしくれでもない、またたくの平民の上にまでくだらぬ簿書が殺到して、わたしの短い人生を浪費するそのあはうしさに大笑せざるをえなかつた。

淡窓は「この日「世説ノ講ヲ起コシ、三体詩ノ講ヲ廢ス」と記し、その下に割り書きしていう。「五律、始メ予、三体詩ヲ説ミ。其ノ清新俊秀ヲ爰ス。講エラク宣シク初等ニ範トスベシト。今之ヲ細説シ。頗ヤ幾經研ウベキヲ覽ユ。宜シフ再説スベカラズ。大抵五律後半卷。遂、疎脱多シ。七言律絶ニ如カズ」。この詩講を子玉も聞いたであらう。

同月二十八日、月旦を改め、増太と豪作を一級上に加え、以後の毎月旦にふたりそろって進級している。

七月九日、古田豪作が死んだ。淡窓の日記にくわしい記事があるが、ここには『懷旧樓筆記』をひくことにする。卷十七である。

古田豪作桂林園ニ於テ歿セリ。歳二十二。諸生塾ニ死スル者。是人ヲ以テ始トス。是ヨリサキ。六七日以来。塾中病ヲ病ムモノ多シ。豪作モ其一ナリ。時ニ予小恙アリ。桂林園ニ行カズ。往來スル者ニ豪作カコトヲ問ヒシニ。豪フル三足ラズトイヘリ。此日ノ暮ニ及ンテ。令助走リ求ムテ。豪作力病急ナリト報ス。驚キ走ツテ行イテ見シニ。已ニ事キレタリ。剝ヨリ返リ。眩暈シテ倒レシカ。其マ、ニ開カズトナリ。発病以来七八日ナリ。予先考ト專ラ往來シテ。喪事ヲ經紀セリ。依屋幸六佐伯ノ用達タルヲ以テ。末ツテ予ヲ助ケテ。喪事ヲ經營シ。又人ヲ遣シテ佐伯ニ報ス。其屍ハ大超寺銀杏樹ノ下ニ。假リ埋ミセリ。其ヨリ十日程ニテ。豪作、兄憲十郎佐伯ヨリ来ル。是ニ於テ。改メテ葬式ニ行ヒ。益多其碑文ヲ作りタリ。今大超寺ニ存セリ。

子玉の作った古田豪作の碑文はいま『愛琴堂全集』にみえない。大超寺がこれを保存しているよう、はやく復写しておくべきだ。淡窓の文をもう少し引く。

益多豪作。皆今年三月ヲ以テ入門セリ。二子佐伯ニ於テ。俊才、稱アリ。國音ヨリ眞糧ヲ賜リテ。他方ニ遊学セシメ。大成ノ後。国用ニ供セントノ恩召ナリトソ。益多ハ俊秀ナリ。豪作ハ温良ナリ。共ニ得難キノ器ナリシカ。豪作ハ志ヲ遂ケズ。益多ハ遂タルト云ヘトモ。亦寿ナシ。

訪秋子良（秋子良を訪う）

子良高隱士 清節似陶潛 野磨江魚足 賛談詩詒無 美稀山骨現 深瘦石核尖 不羈歸途暗

子良は高隣の士。清節は陶潛に似たり。野膳に江魚の足く。農談は詩詫を兼ねたり。葉稿にして山骨現れ。溪瘦せて石棱尖る。帰途の暗きを畏れず。月光は万杉を穿つ。

八月か九月（この作であろう。平凡だが、七八句やや清新で、七句は李軍の「榆拂山鳥見」〔遼泰光祿北征三十〕を思わせる。とはいっても、このときすでに賀の集を読んでいたかどうか。

憶佐伯十五首之一（佐伯を憶う十五首の一）

飛狐簷處試豪遊　夾道松杉白日幽　谷暗高嶺山鬼語　林深樹杪猿愁遠帆忽入雲中盡
嶼宛如天際浮　茅屋歸來心恍惚　夢魂猶掛湯泉頭　_{〔暮姑在佐伯〕}

飛狐簷ける處　試みに豪遊す。道を夾みて松杉　白日に幽なり。谷暗うして高嶺（かげい）しく山鬼語り。林深うして樹杪に猿愁の愁う。遠帆は忽ち雪中に入て尽き。遼嶼は宛如として天際の如く浮ぶ。茅屋に歸来して心恍惚、夢魂は猶お掛かる湯泉の頭。

本文の「飛狐」注に「「飛姑」は佐伯の彦山をさすのである。淡窓の評がある。」

七言ノ律体ハ諸家ノ難シトスル所。王維・李頃・顧爾其ノ妙ニ臻しリ。而レドモ一題ニ二章ヲ連ヌル能ワズ。オニ限リアルナリ。秋興八首ハ少陵ノ千古ニ独歩スル所以。而レドモ篇中アルイハ駕末ヲ免レズ。イマ十五首ニ至ル、豈ニ驚天動地ノ大著作ト謂ワザルベケンヤ。抑モノノ十五首ナルモノヲ移シテ以テ一首ヲ造ラバ、豈ニ結構至精ナラズヤ。

十六歳の少年が、才氣にまかせて七言律詩十五首の連作を、得意満面、師に見せる。師はに

にこしながう「ほほう、大したものじゃなか」とまずほめてやり、手にとつて朱筆で圈点を加えてゆく。ふと途中で筆をとめ「だがね、益太・七律といつものは、だね!」そんな表情と声とがみえてくるようだ。詩人としての矜持よりも教師としての篤実が、つねにこの人のことばをあたたかくしているようである。

桂林國書意　（桂林園にて意を書す）

劍客　一自出田居　久寓淮南小草廬　篠外青山呼欲答　檻前碧水画難如　家鄉修竹偏清絕　心與浮雲時卷舒　留滞宦恩張翰財　盤飧元不乏鱸魚
劍客　一たび田居を出でしより。久しく寓す淮南の小草廬。篠外の青山呼べば答えんと欲し。檻前の碧水画けれども如難し。家門修竹に鄰して徳之に清絶。心に浮雲と時に卷舒。留滞するも豈に思わんや張翰の財。盤飧元不乏鱸魚に乏しからず。

自寓東園歲暮迴　寥々宿志豈消磨　一簑秋雨人孤坐　千里鄉書雁幾多　伐木詩因懷友賦　涉

岵草爲表親歌　晴風作意捲雲去　坐使愁心對素娥

東園に寓せしより歳は晏しげ過ぐ。寥々たる宿志。豈に消磨せんや。一簑の秋雨に人は孤坐し。千里の鄉書雁。終多。伐木の詩は友を懷うに因つて賦し。涉岵の草は親を慕うが爲に歌う。晴風。意を作し。雲を捲いて去り。坐るに愁心をして素娥に對せしむ。

休道興陽不若秋　東園春色自清幽　柳容籠月照危峯　花氣襲人入小樓　_{此ニ句夢中所傳}　膠漆

相離他席友　琴尊聊解故鄉愁　錦囊近日無佳句　吟苦不知長夜流

道うを休めよ 豊陽は秋に若かすと。東園の春色は自ら清幽。柳容は月を籠め危崖に飄し、花氣は人を襲つて小樓に入る。膠漆相應す他帝の友。琴尊卿が解く故郷の愁。蕉囊には近日佳句なく。吟苦 長夜の流るるを知らす。

「童穀集卷之一」は二の詩でおわる。すべて二十九首。「懷佑伯十五首」が二首をどめるだけであるのは、師の教えを謹しんだからであろう。

—〇—

文化十三年九月二日、淡窓は官奇(日田あがき)で『世說』の講義をはじめたが、十六歳の子玉を代講とし、従来の月六回を、日講としている。そうして同じ月の十一日の淡窓の日記には「世說卒業」としるす。素読なのであるが、それにしても驚くべき速度だ。それを聞き、「なす生徒、それを讀する子玉の学力、ともに想像をへえる。十一月十三日、塾での会読は『史記』の世家を卒えたが、淡窓は、子玉に命じて本記を讀ませている。同じ月の二十六日、子玉は塾の副監兼史記会統を命ぜられた。その月の月旦評では四級下にのぼる。

十二月十一日、心中があつた。淡窓の日記には簡単にするのみだが「懷旧格筆記」には敷演する。この事件は後年の子玉の作にかかることがあると思われる。

朝余猶臥尋ニアリシニ。門前ニ喧シク語ルモノアリ。昨夜竜馬ノ森ニテ。男女対死スル者アリ。

女ハ己ニ死セリ。男ハ猶^活セリト。余驚キ起ツテ。眞事ヲ尋ネ問フウキ。諸方ヨリ。彼地ニ行イテ観シ者。遂ミ歸リ來レリ。男ハ竹田城下山本屋安右衛門ト云フ者ナリ。女ハ秋月城下一向京寺ノ女ナリ。此ノ女竹田ノ人長門屋桂助ト云フ者ニ嫁セシカ。山本屋ト密通シ。事アラハレテ。秋月ニウヘサレタリ。山本屋亦其家ニ居ルコトヲ得ズ。郷里ヲ去ツテ。遂ニ彼女ト夫婦二十リ。處ニ瓢泊セシカ。此ノヨロ。共ニ日田ニ來リ。此ニ至ツテ同シク死セリ。男ハ未タ死セスシテアリシニ。人行イテ之ヲ救ヒ。遂ニ活ケルコトヲ得タリ。其二子竹田ヨリ來リ。霜ニ負ウテ帰レリ。因ツテ僧トナリテ。余年ヲ送リシカ。今年ヨリ十三年ニアタル時。劍再発シテ。死セシトソ。彼ノ女。竹田ニ嫁スルトキ。余モ其面ヲ知レリ。男モ又カツテ我家ニ宋リシコトアリ。故ニ之ヲ錄ス。安左衛門弱年ノ時。行草極メテ謫寧ナリ。嘗テ國書ヨリ恩賞アリ。市中ノ少年。ヨロシク此ノ人ヲ以テ模範トスヘシトノ命アリシトソ。人ノ始末測リ難キコト。此、コトシ。謹マサルヘケンヤ。

さて子玉の「卉犬集卷之二」のはじめは、

下道儒屋作五首

石橋東去踏深泥 路入平田疊欲迷 柳帶汀沙春月小 雪籠嶺岫夜山低 竹間燈下三叉里 樹裏泉聲九馬溪 自笑近來瓢泊甚 又移瓢鳥一枝桜
石橋を東に去きて深泥を踏む 路は平田に入つて屢しば迷わんと欲す。柳は汀沙を帶びて春月小さく。雪は嶺岫を籠めて夜山低し。竹間の灯火 三叉里。樹裏の泉声 九馬溪。自ら笑

う近來輒泊する一と區しく。又移る露鳥一枝の棲。

家鄰墳墓竹林深

永晝斯然抱膝吟

山出片雲爲暮雨

水吹輕霧作春陰

垣籬只任鶯鶯過

古更看斑蘚侵

休道僻鄉同侶少

野童溪叟日相尋

家は墳墓に鄰して竹林深し。永晝斯然抱膝吟。山出片雲爲暮雨。水吹輕霧作春陰。垣籬只任鶯鶯過。壁は輕霧を吹いて春陰となる。垣は頽れて只だ任す鄰鶯の過ぐるに。壁は古びて更に看る斑蘚の侵すを。道うを休めよ僻鄉に同侶少しと。野童溪叟日びに相尋め。

幽審翠色映蒼檻

此際風煙画不成

書爲移居多隱歎

恨因止酒乏詩情

竹鄰窓紙書聲響

統亮阿掩影清

笑謝村翁憐久客

盤飧常贈薤蓬羹

龜峯の翠色

蒼檻に映す。此の際の風煙

画けども成らず。喜ぶ畠を移すが爲に隱歎多きを、

恨む酒を止むるに因つて詩情乏しきを。竹は窓紙に鄰して書声響き。水は亮阿を統つて薄影清し。笑って謝す村翁の久客を憐れみ。盤飧常に薤蓬の羹を贈らるるを。

自萬江村久不還 悠然養病閑柴牀 身如巢燕長爲客 便似野僧常樂閑 清愁復寫松上鶴 晴窓晴數雪中山 近來殊覺臺情絕 梦到浮雲流水間

江村に萬せしより久しく還らず。悠然として病を養いて柴牀を聞す。身は巢燕の如く爛々晴となり。心は野僧に似て常に閑を樂しむ。清愁復写た驚く松上の鶴。晴窓晴れて数う雪中の山。近來殊に覺ゆ臺情の絶けるを。夢に到る浮雲流水の間。

劖書萬跡在江村 窮巷不聞車馬喧 偶見先生蔽竹臺 笑呼稚子拂風軒 山無遠近事時盡 大

自東西引灌園 南里移居更相憶 月明携手叩柴門

劍齋 跡を寓して江村に在り。窮愁に口間かず車馬の喧。偶てま見る先生の竹屋を歎かるるを。笑つて稚子を呼び風軒を拂う。山は遠近と無く爭つて勝に當り。水は東西より引いて園に漫ぐ、南里に居を移して更に相憶う。月明に手を携えて柴門を叩す。

淡窓はこの詩を批評して「五首、復タ旧阿蒙ニ非ズ。後生畏ルベシトハ、斯ノ人ニ非ズシテ誰ゾ」と云め、しかし第二首の「休道」第四首の「近來」の句を「齋窓」といつてゐる。

文化十四年丁丑（一八一七）淡窓三十六歳。子五十七歳。淡窓は文化二年、二十四歳、講學で身を立てることにきめ、豆田一丁目に家を借り成章舎と名づけた。四年五月、豆田の東偏裏町に田数畝を借り書塾を新築した。桂林園である。次の年、病氣のため、父母のいる豆田魚町に歸り以後、桂林園に通勤した。ところが「桂林園ハ魚町ヲ去ルコト。ニ丁ニシテ遠シ。且ツ隨處ノ地ナリ。塾生、行事ニ於テ、耳目行届カナル事多シ。是ヲ以テ規律嚴ナラズ、遊惰ノ徒、常ニ憚焉トシテ自ラ恣ニセリ。予其弊ヲ知ルト雖モ、身已ニ婚ラ成セリ。塾生ト同居スヘカラズ」といふた事情で、二年ほど前から転居しようと考えながら、延びのびになつてゐた。この年正月七日、塙田村で起工し、十五日、書生中島益多、塙山屯を魚町にうつらせ桂林園を空け、十七日その家を解体して塙田にうつした。二十一日、下道に家を借り、益多と大志を住ませ、工事中の教場とした。子玉の詩題に「下町篠居」は、この借り家の仮り住まいをさす。

二月二十三日、淡窓はほぼ工事のできた塙田に転居した。咸宜園である。子玉ら塾生十五人が